2024

ひきこもり支援フォーラム

「わけない・わからない・わけられない」を考える

ダイジェスト

ひきこもり支援においては、ひきこもりについての理解や共通認識を持ちながら、個人の意思や尊厳を尊重し、寄り添っていくことが重要です。本人や家族が安心して暮らせるように、行政、民間を含めた教育や福祉、まちづくり等の多分野が連携し、ひとりではないと思える居場所や信頼して頼れる地域づくりの推進を目指して、本フォーラムを開催しました。

令和6年（2024年）9月29日（日）開催
佐久大学6号館101号室

CONTENTS

02 〈講演〉
8050 問題から考えるひきこもり支援と孤独孤立について
講　師 勝部 麗子 氏　豊中市社会福祉協議会 事務局長

09 〈トークセッション〉
地域は ひきこもりにどう向き合うか
登壇者 草深 将雄 氏　hanpo 当事者によるフリーペーパー発行団体 代表
元島　生 氏　NPO 法人場作りネット
勝部 麗子 氏

社会福祉法人 長野県社会福祉協議会

講　演

8050問題から考える ひきこもり支援と孤独孤立について

豊中市社会福祉協議会の取り組みから

講師
勝部 麗子 氏
Katsube Reiko
豊中市社会福祉協議会 事務局長

大阪府豊中市生まれ。1987年、豊中市社会福祉協議会に入職し、ボランティアセンター、小地域福祉ネットワーク活動、当事者組織など、地域組織化や地域福祉活動計画に携わる。2004年度に始まった大阪府地域福祉支援計画のコミュニティソーシャルワーカー（CSW）設立事業の一期生となって以来、CSWとして制度のはざまの課題を解決するプロジェクトの立ち上げ等に取り組んでいる。厚生労働省社会保障審議会の特別部会委員として、2015年施行の生活困窮者自立支援法策定にもかかわる。NHKドラマ「サイレント・プア」（※）のモデルになり、監修を務めた。「プロフェッショナル仕事の流儀」にも出演。

阪神淡路大震災を機に始まった重層的な支え合いの仕組みづくり

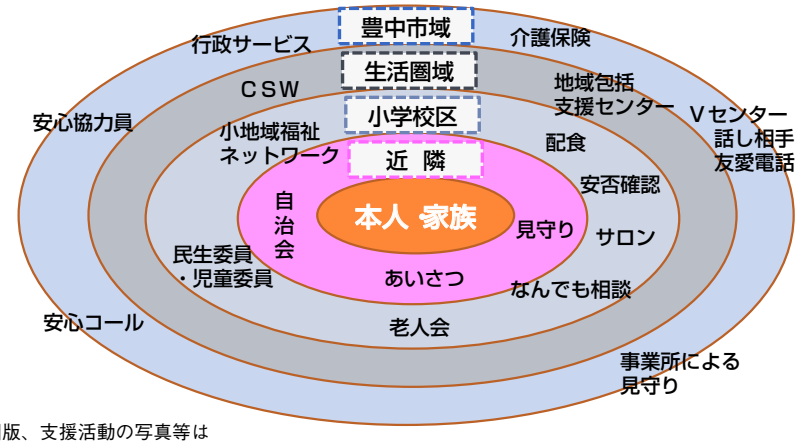
豊中市は、人口40万人の町で大阪のベットタウンです。30年前に阪神淡路大震災が起きた時、住民一人ひとりがつながっていないと助けてくれる人がいないことを目の当たりにしました。しがらみはいらないけれども、つながりの必要性を痛感し、震災の翌年から、豊中市社協では各小学校単位の見守り活動をずっと続けてきました。ご近所の目を気にすることのない程度のゆるやかな圏域でのいろいろな支え合いの仕組みです（図1）。

見守り活動では主に一人暮らしの高齢者が対象でしたが、次第に老老介護や二人とも認知症という認認介護の家庭などのいろんな問題を発見するようになります。

ある一人暮らしのお年寄り宅のお隣にごみ屋敷がありました。何とかならないかと、地域の人は自治会長や民生委員に相談しました。その家では親が亡くなり、60代の息子が一人で生活しており、市役所に相談したところ、高齢・障がい・児童のどの分野の支援制度にも当てはまらず、ごみの話だから環境部に相談したらどうかというように、制度の狭間の問題が起き始めました。

地域の人が困りごとを見つけて「相談にのってもらうようにするからね」と本人に言って一生懸命動いても、制度の狭間で解決できず、結局「ごめんなさい」と言わざるをえない。そうすると問題の掘り起こしをしていたのに、だんだんと埋め戻しが始まったのです。本気で見守るとなるといろんな問題を見つけてしまうから、見つけない方が自分の安心になるので、あまり本気で動かないでおこうという雰囲気になったのです。

①豊中における重層的な見守りの方法



図版、支援活動の写真等は講演資料より引用

図1

声なきＳＯＳに向き合う全国に先駆けて配置された CSW

そうしたこともあって私は以前から専門職のCSW（コミュニティソーシャルワーカー）の必要性を訴え続けていました。そして20年前、全国に先駆けて大阪にCSWが配置されることになり、重層的支援体制整備事業の断らない相談の原型のような制度がスタートしました

※「サイレント・プア」　2014年にNHKで放送された深田恭子主演のテレビドラマ。当時、特に高齢者や障害者などの家庭で、見えにくい貧しさと戦う人々の存在が問題とされ「声なき貧困＝サイレント・プア」と呼ばれていた。ひきこもり、ホームレスといった声なきSOSを見つけ出し、向き合っていくコミュニティ・ソーシャルワーカーの活動を描いた社会派ドラマ。

図2

（図2）。

制度の狭間に着目したことで、様々な問題が見えるようになってきました。制度に当てはまらない人にこそ様々な課題があり、SOSを出せず苦しんでいる人たちがいるのではないかと、地域の人たちと一緒にまちの中の問題を発見し、解決していく活動を始めたわけです。

地域のボランティアの皆さんが運営する「福祉なんでも相談窓口」は地域のＳＯＳを掘り起こす活動です。公園にいるホームレスの人や親なき後の生活力を欠く60代の息子さんの9060問題など、地域の人たちが「何とかしないといけない」と動き出しました。

現在は地域の人との間に「発見してください。解決します。」という関係ができているので、多くの人たちからまちの中のちょっとした困りごとの相談が社協に入るようになりました。

ローラー作戦と見守りマップで一人も取りこぼさない

SOSを出せない人たちを探し当て、見守るために始めた活動が見守りローラー作戦と見守りマップです。ローラー作戦は探し当てるというよりも制度がわからない人たちに届けるといった感じです。

活動のきっかけは8年前、50代の娘さんが熱中症で亡くなり、その後、80代の父親が白骨状態で発見され、年金詐称が疑われた事件でした。毎月一人暮らしの高齢者世帯を全戸訪問していた担当の民生委員さんがマスコミ取材で非難を受け、とても苦しんでおられました。80歳の親を50歳の娘が介護している家は一般的な介護家庭です。しかしそうした家庭をなぜ訪問しなかったのかと責められたのです。その後、娘さんが知的ボーダーらしいことがわかりました。

父親が亡くなったとき、誰も対応する人がまわりにいなかった社会のあり方が問われる出来事だと私は思いました。そこで地域のみんなで訪問をして対応する必要があると見守りローラー作戦を始めたのです。

チラシを渡して「何かあったらどうぞ」という簡単な訪問で、最初は玄関で門前払いしていたご家庭が「ひきこもりの相談も対応できます」という文面を見て相談されたこともありました。

どこに相談していいのか、いまだ明確な窓口すらないところがたくさんある中で、どうやってそれを届けるのかは重要なことだと思っています。

見守りローラー作戦は年間3600軒

社会的孤立の SOS 見て見ぬふりをしてきた私たち

日本は今、家族以外との付き合いがほとんどない人の割合が先進国の中で最も高くなっています（図3）。家族だけで閉じこもり、どこからも情報が入らず、家族は苦しんでいます。

20年前、私が初のCSWになった時、ごみ屋敷問題の相談をたくさんを受けました。さらに孤独死、薬物依存、虐待、8050問題など様々な課題に対応しました。そして今は空前の不登校の増大です。去年は過去最多となり、今年もまた更新してます。生きづらくなって、苦しんでいる人たちが増えていることに、私たちは何かがおかしいと思わなければいけません。そこには社会的孤立の問題があり、ひきこもりの問題も30年間、私たちが見て見ぬふりをしてきた結果であり、今の現状だと思っています。

地域共生社会の中では「誰一人取り残さない」と言っていますが、現状はたくさんの人が取り残されています。SOSを出せない人たちは、今の社会の中ではなかなか見つけ出してもらえません。特にひきこもりの人は見つけ出されたくな

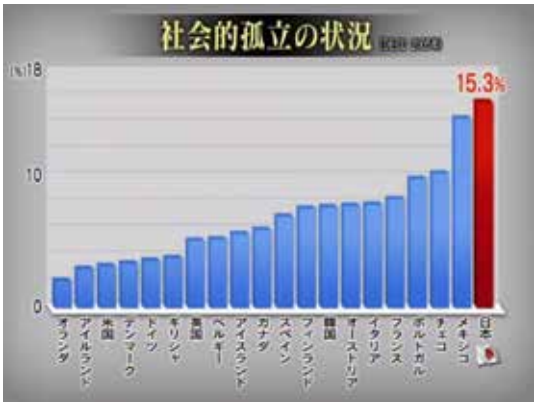


図3

社会的孤立の状況（OECD 諸国の比較）　友人やグループなどの人と全く、あるいはほとんど付き合わないと答えた人の割合
資料：Society at a Glance | OECD Social Indicators - 2005

いと思っているので、そうした人たちがSOSを出せないまま、1年経ち、5年経ち、10年と経っていくのです。

8050 問題、家族の苦しみは こぼれそうなコップの水

80代の父親の方が、ひきこもりの息子さんのことで自分がいなくなった後、どうしたらいいのかと相談に来られました。息子さんは中学校のときにいじめがきっかけで不登校となり、就労しても長続きせず、だんだん強迫性障害になってトイレに閉じこもるようになりました。いろんな人に相談したが、誰も助けてくれなかったっていう話でした。

父親は私にコップを見せて次のように言いました。「僕たちはこのコップの中に水がいっぱい入っているような状態だった。コップを動かすと水がこぼれてしまう。変化させることが一番怖かった。だからできるだけ何にもしないようにと思いながら30年が経ちました」この家族は何もしなかったわけではなく、家の中でいろいろな葛藤をしながら過ごしていたけれども、まわりはその家族の内情を理解することはありませんでした。ご近所から「お宅の息子さんはどうしているのか」と聞かれるのが嫌で近所づきあいをできるだけしないようにして、親戚からは「あなたたちが甘やかしてるから」と言われるため法事などはお金を送るだけにしているとのことでした。

家族だけでカプセルみたいに閉じこもり、できるだけどこにも出かけず、まわりとのつきあいをやめ、ますます孤立を深めていきました。誰にも相談できず苦しい思いをしている当事者、どうしていいかわからないまま生活している家族がたくさんいることを私たちは知る必要があります。

ひきこもり問題は ソーシャルネグレクトである

生きづらさを抱えた人たちはなぜこうした状況になるのでしょうか。一般的にはセルフネグレクトと言われ、自暴自棄になって自分自身に関心がなくなってしまう側面はあるかもしれません。しかし、一度や二度、必ずどこかに助けを求めているはずです。その時、誰も助けることができなかったのだから、これはソーシャルネグレクトです。社会がこうした人たちの問題を見ようとしなかったのです。

内閣府の調査では、全国にひきこもりの状態にある人が146万人いるとされ、およそ50人に1人の割合です（※）。

ひきこもりの人たちは家からまったく出てこない人ばかりではありません。ネット通販で物を買ったりとか、コンビニに行ったり、社会とつながってはいます。家族にすると、うちの子はひきこもりではなく、家のことは手伝ってくれるのだけれど社会参加のようなことは難しいという人たちがたくさんいます。

社会の中で生きづらさがある人たちを放置し、支えられない公教育があり、社会参加に再チャレンジできない仕組みがあるのではないか。日本が賃労働による社会になって100年あまり。履歴書を書いて働くことができない人たちが大勢いて、居場所がなくなっているのは、社会システムの方がおかしいのではないかと思わないといけません。そしてその社会のあり方を変えていく必要があります。

今頑張っている人たちも、仕事でいろんなことを抱えるうちに、バーンアウト（燃え尽き症候群）して、メンタルをやられてひきこもってしまい、さらに苦しい社会になっていくのではないかと思っています。

生活困窮者自立支援法などにおいて支援を始めていますが、ひきこもりの場合、困窮していなければつながりにくいことがあるので、ひきこもり支援センターの設置も提案されています。

就職氷河期の課題

8050問題の80にあたる人たちは、高度経済成長期で終身雇用により最後まで仕事ができていた時代です。ところが、50にあたる人たちは就職氷河期で、リストラをはじめ、何度もドロップアウトさせるトラップ（罠）があり、真面目すぎて世渡りが苦手な人はそれに引っかかって落ちてしまう。社会に出られると思っていたのに、傷ついてうまくいかず、ハラスメントなどを受けて苦しさを繰り返す人たちが増えました。

特に40代まで派遣で頑張っていた人たちはある程度の年齢になると仕事に就けず、正規雇用の人たちも過重労働により真面目な人ほどメンタルをやられて仕事ができなくなる。8050問題は経済構造によって生まれた負の遺産です。

ひきこもりのパターン

ひきこもることができるだけの家庭の余裕がある人たちは、発見が遅れます。親が囲うことができるいうことです。

※内閣府によるひきこもり実態調査　2023年度「こども・若者の意識と生活に関する調査」より。家にいるひきこも状態の人は15～64歳の生産年齢人口において推計146万人いることがわかった。

10年前にNHKで放送されたドラマ「サイレントプア」の「30年の孤独」の回はそうした事実をもとにしています。銀行員の父親が家にいる息子さんを「海外に行っている」と偽って社会から隠すというエピソードです。本人はいるのにいない存在とされ、尊重されていないのだからどれだけお金をもらっても心は満たされず苦しんでいるという人権を無視した話でした。

経済的余裕があり、親が頑張りすぎている家庭は支援が入りづらく、一方で経済的に困窮している家庭のほうが、働けないことから比較的顕在化しやすいので、サポートが早く入る可能性が高いです。

【事例 1】20 年以上のひきこもり

父親が大企業に勤めていて、転勤により子どもがいじめにあい、受験を失敗。家庭内暴力をふるうようになり、その後20年以上ひきこもりとなったという相談がありました。私たちは、両親に家族会への参加を呼び掛け、本人を居場所から就労体験、就労支援へとつなげました。

経済が右肩上がりの頃に働いていた親の価値観で、「ふがいない」とか「お前はなぜ仕事に就けないんだ、仕事選ぶな」などと言われると、どんどん傷ついて孤立が進みます。

親の言葉に傷つけられ、それが積み重なってくるので、一歩間違えると恨みが募っている状態の家庭もあります。

【事例２】強迫性障害で家族を支配する息子

強迫性障害の息子さんがトイレやお風呂にいる時間が長くなって、家族が支配されているという相談を受けました。保健所に相談しても何も変わらず、どうにもならないので、ネットを調べたら10万円で精神科の病院へ無理やり連れて行く業者を見つけたので依頼を考えているとのことでした。

私は「それだけのお金を払うのなら本人のために置いておいてあげてください」と伝え、本人と話をして自分が治療したい意思があるのなら自分から病院に行けばソーシャルスキルを学ぶこともできるという説明をしました。その後、彼は認知行動療法を受け、障害者手帳を申請。就労プログラム活動後、週２で働けるようになりました。

ひきこもりの人を社会に出られるよう更生させようという産業があり、いわゆる「引き出し屋」には注意が必要です。

【事例 3】LGBT の 50 代

体は男性だけど心が女性だったといういわゆるLGBTの50代の方から相談を受けました。

小学校の時に内股で歩いていたら、みんなにいじめられて、それから学校に行きにくくなったということでした。ひとり親家庭で育ち、母親の再婚後、新しく来た父親が「ふにゃふにゃしているから心を入れ替える必要がある」と言って、家から離れた教育訓練校のようなスクールに入らされ、頭を丸刈りされて心身ともズタズタになって帰ってきたといいます。

新しいパートナーに対して母親は立場が弱く「この子を守ります」と言えず、苦しかっただろうと思います。このようなような父親から子どもを守り、人権を尊重した支援に変えられるよう私たちも勉強しなければなりません。

【事例 4】親亡き後のひきこもり

親亡き後の8050や9060問題は今後どんどん増えていきます。

大学卒業後、社会にでられないひきこもりの息子さんと年老いた母親の家庭があり、母親は近所からもらった福祉なんでも相談チラシを持っていました。母親はチラシを冷蔵庫に貼って、息子さんに「いつか気づいて」と念願し、その後亡くなりました。しばらくして私たちはチラシを見て相談に来た息子さんとつながることができました。ご家族が生前に支援してくれる相談先を息子さんにダイニングメッセージで残せたことは良かったと思います。

ご家族にできることは、親はいつか先に死ぬから、今できることは自分以外に本人を助けてくれる人をつくっておくこと、その場所を本人たちにきちんと伝えることです。あわよくばもう少し早くに支援者を迎えて「この人が助けてくれる人だよ」と伝えておくことがとても大事だと思っています。

“ 支援臭 ” を出さない支援を

私はこれまで数多くのひきこもりや不登校の子どもたちの支援にあたってきました。そこで大切なのは、“支援臭”を出さないことだと思っています。なぜならその人たちはただ社会に出ていくタイミングや居場所、役割を見つけることが難しかっただけです。本人を尊重し、理解するためにも同じ目線に立ち、対等の関係性で関わることが大事だと思っています。

メダカをきっかけにつながった支援

中学校の時にいじめにあって、それから家から一歩も出ることができなくなり、苦しんでいた若者と出会い、家庭訪問することになりました。彼はメダカを繁殖させることが好きで、訪問した家の軒先にはメダカの水槽がたくさんあり、私は興味を惹かれました。

「どうやってメダカを育てているの? 販売したら高く売れるのかな？」と何気に聞くと、彼は一生懸命説明してくれました。そこで私は「今、ひきこもり状態に

なった人たちの居場所『豊中び～のび～の』（※）を作ってるんだけど、メダカを売って活動費に充てたいので育て方を教えてくれない?」とお願いしました。すると彼も「いいですよ」と言ってくれ、人のいない時間帯を見計って教えに来てもらうなどいろいろ工夫をしながら、メダカの繁殖をはじめました。

コロナ禍、老人ホームやこども園などの施設をはじめ、一人暮らしの高齢者の自宅にも持っていき、彼と育てたメダカが街中のいろいろな人たちを励ますことになりました。

もともと力もあり、いろいろな好条件が重なったこともあって、現在彼はIT会社の社長になっています。

通常の支援の多くは訪問したら、まず体調はどうなのか、これからどうしていきたいのか、どんな仕事を就きたいのかと聞いてしまいがちです。どこで誰とどんなふうに出会い、何がきっかけになるかわかりません。彼との出会いを考えたときに、“支援臭”がしない関わり方の大切さを実感します。

メダカ販売のチラシ

54回のアウトリーチ 野球の話題から支援につなげる

何人ものひきこもりの人たちへのアウトリーチをしてきた中で、本人と話せるようになるまで訪問した回数が54回という人がいます。

豊中の生活困窮者支援

CSWの相談の中で対応が難しかった就労まで
距離のある若年の支援(ニート・ひきこもり・リストラ・ホームレス等)
→就労準備的な活動*本人との目標設定(PSプラン)

居場所→就労プログラム→就労体験→就労

①**居場所（豊中び～のび～の）**…週4回(生活面と自己肯定感、仲間意識)
②**就労プログラム**…2時間一コマ活動費支給
③**就労体験**…新聞配達、団地の草ひき、買物支援、パン屋さん
農業、林業、うどん屋さん等
→職域開発地域のネットワーク発揮活動費支給
④**びーの×マルシェでの定期的な就労体験**
⑤**就労訓練**…パートで一定期間仕事に就く(この間就活)
⑥**就労支援**…就労支援センター・ハローワークとの連携

ステップアップ

アウトリーチ	居場所参加	中間的就労	就労体験	就労準備	一般就労
家庭訪問 家族会参加	生活支援	500円/2H	新聞配達	就職活動 地域就労支援センター	OB会

図4

話しかける話題が尽きてきた頃、翌日高校野球の決勝戦で地元豊中市の履正社高校と石川県の星稜高校との対戦があり、私がなにげに「明日は履正社が勝つと思うよ」と口にしたら、そのとき彼が初めて微笑んで「星稜ですよ、明日は」と言ったのです。そして「野球はどこのファンなの?」と聞くと、「僕は巨人です」と答え、そんなたわいもない話から少しずつ支援の話ができるようになりました。

私は彼をただひきこもってる青年としか見ていなかったけれども、スポーツを見たり、ニュースを見たり、多くの情報に触れていろいろなことを考え、社会とどうつながったらいいのか悩んでいる一人の青年だということにあらためて気づかされました。

数字にも強かった彼は、その後、税理士事務所で働き始めました。間違いが全くないと所長も大喜びで、先日はその事務所の方が来て彼の話をしてくれました。所員の方の子どもが不登校でひきこもりになり、どうすればいいのか話題にしていたところ、その彼が「豊中市社協の勝部さんのところに行ったらいいんだよ。僕はあの人に助けられたんだ。きっとお子さんも助かると思います」と言ってくれたそうです。私たち職員はみんなで喜び合いました。

たわいもない話から趣味や好きなことなどを聞きながらその人のことを知って、将来の話などをすればいいのに、私たちは会ってすぐ「あなたは何をやりたいんですか」と聞いてしまいがちです。本人にすれば「自分のことを何にも知らないのに」とズケズケ入ってくることに対して抵抗感があるのだと、彼の支援を通じて考えさせられました。

※豊中び～のび～の　発達障害、ひきこもりなどで就職に距離がある人が様々なプログラム活動を行う場所。2011年から豊中市社会福祉協議会が主催。野菜づくりや手工芸、パソコン、カフェ運営など、参加者が行なった作業に対して活動費が支給される。居場所への参加が難しい当事者や、家からなかなか出られない当事者に対しても、本人の活動できる場所でのオーダーメイドのプログラムが用意されている。

アート展で不登校支援 第三者に評価されたことで 幸せな気持ちに

文章や絵などが得意なアーティストも多く、そんな人たちに出会うと私たちは感動します。アートが力になって社会に出られる子どもたちがたくさんいることも分かりました。

親の会に来られていた母親からひきこもりの息子さんがとても素晴らしい絵を描いていると話されていたので、作品を見せてただきたいと訪問しました。本当にとても素敵な絵だったので、まちなかのアート展に展示しました。そこに来た人がその絵を賞賛する姿を見て、本人もお母さんも「とっても幸せな気持ちになった。人生で生きていて、一番幸せな日だった」と言われました。

誰かに必要とされることを家族だけで見出すことはとても難しいです。親のひいき目でなく、第三者から「すごいね」と言ってもらえる関係性ができれば、そこに社会性が生まれ、親も子どもも救われるのです。

特技を生かして社会参加 支えられた人が支える人に

アウトリーチで出会った人のなかにも隠れた才能や特技を生かして自分を変え、社会につながった人も多いです。すごい才能を持っているのにチャンスに恵まれなかった人たちは、私たちの社会で足りない部分を補ってくれると思っています。

『豊中び～のび～の』プロジェクトは、プログラム参加の中でオーダーメイド型の支援を行う活動です。漫画、詩、出版、音楽、手作り、農業、将棋、なぞなぞなど本人のやりたいことを聞き出して、やりたい活動に参加してもらいます。

ここで私たちはひきこもりの人たちを支えられる人ではなく、支える人として捉えることも必要です。例えば高学歴のひきこもりの人なら、不登校の子どもたちの勉強をみてあげたり、オンラインゲームでつながったりして、学校の先生OBの学習支援よりもずっと近しい関わりができます。また、同じ悩みを持っている人たちと一緒にピアグループをつくったり、学校教育や今の社会のおかしいところについて提言したり、当事者だからこそできる役割はたくさんあります。

すべての人に居場所と役割を

居場所や役割がない社会というのはとても弱い社会だと思っています。どこにも居場所がないと思っている人たちがたくさんいます。自分が満足できる、あるいは満足できなくても「自分ちょっとイケてるな」と思える居場所は必要です。

自分が安心できる居場所はどこかと考えたとき、近所よりも遠い場所のほうが良い場合があります。学校でいじめられてた子は近くの子ども食堂に行けばまたそこでいじめられるから行きたくはない。送迎してもらい、近所から離れた場所へ行くことができれば、安心して自分らしく力を発揮できることもあるわけです。

支えられていた人が支え手に変わる　豊中市のひきこもり支援

壁面アートで不登校支援
外に出れるきっかけに

福祉便利屋の取組
200円 /15分の支え合い

地域での学習支援の場づくり

就労体験プロフラムでジョブサポーターと共に府営住宅での出前市場でお買い上げ商品運びや情報誌・新聞配達などの仕事を体験。

豊中市小売商業団体連合会との協力でオープンしたびーの×マルシェ。ひきこもり経験者がスタッフとして働く。

2023年度から始めた不登校支援のエンパワメントスクール「リスタート事業」。アニメ動画づくりやプログラミングなどを体験。

地元の目を気にせずに広域連携での相談支援

私たちのひきこもり支援について様々なメディアで紹介されると、私のところに「県外でも相談に乗ってもらえますか」と全国から相談が来ます。

基本的に相談は断りませんが、出向くことはできないので、「そちらの地元の相談機関につなぎます」と返答してます。すると「役場の福祉課の職員は親戚で、家の中のことが全部知られてしまうから絶対嫌です」とか、「民生委員さんは本家のお嫁さんだから」と言われる場合があります。

全国展開しているNPOには、個人情報を伝えなくてもいろんな相談にくれるところもあり、ヒントは得られるようになってきています。自分のことをカミングアウトするのは関係ができた時に言えばいいので、いろんな人たちが相談に来られています。

先日、他県の80代の女性から相談がありました。息子さんが関西にいて、ほかの家族には内緒で30年ずっと仕送りしてきたが、ご自分の足が悪くなって金融機関に行くにも家族の車に乗せてもらわないといけなくなったと言います。こっそり送ることができなくなってしまい、自分に何かあったら生活力がない息子は死んでしまうかもしれないと悩んでおられました。

私はその息子さんと会い、事情を話しました。その後いろいろと手続きをして、息子さんは生活保護で生活できるようになりました。

「教職員のための福祉との連携ガイド」豊中市・豊中市教育委員会発行

全国ネットでこうした生活困窮者支援のチームがあれば、助けることができるようになっていますので、支援者の皆さんには知っていただきたいと思います。

不登校にさせないために学校と福祉との連携

学校にいる時からもっとつながって支援ができたなら、長い間親子でしんどくならずに済んだのにという思いから、早期段階での解決のため豊中市では「教職員のための福祉との連携ガイド」を作りました。

現在は連携ガイドとともに週1回お弁当を届けながら今は90世帯ほどを訪問し、不登校900人の子のうち半分ぐらいは大体把握できるようになりました。そして、リスタート事業として野菜収穫体験や学習支援、絵画、プログラミング、デジタルアニメ動画作成などを通じてみんなで交流する活動につなげています。

ひきこもり問題を社会に理解してもらうために私たちはまだまだしなければならないことがたくさんありますが、少しずつ当事者が発言できるようになり、世の中は少しずつ動いている気がします。

「ふつう」というギプスをはずすために

アスペルガーの子の詩を紹介します。

ふつう
みんながぼくらにいってくる
「ふつう」になれといってくる
ぼくらは「ふつう」になれないのに
ふつうというギブスのせいで
ぼくらはいっぱい傷ついて
ひとりぼっちでないてきた
「かわれ」「かわれ」ってみんながさ
ぼくらにいってくるけどさ
ほんとにかわらなきゃいけないのは
ほんとにぼくらなの？

「ふつう」って何でしょうか。「ふつう」というギブスをどうすればはずせるのかを彼らの言葉から考えさせられます。

100年前の普通は、今の普通と違っていました。20年前の普通と今の普通も違うはずです。私たちの気づきによってこれから先の社会をどう変えていくかが問われています。ひきこもり当事者の人たちが生きづらい、居場所もない社会はいつまでも続くはずがないので、みんなで声を上げて、少しでもより良い社会に変えていけるよう支援を続けていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

トークセッション

地域はひきこもりにどう向き合うか

勝部 麗子 氏 *Katsube Reiko*

社会福祉法人豊中市社会福祉協議会
事務局長

豊中び～のび～の
マスコットキャラクター
び～のん

草深 将雄 氏 *Kusafuka Masao*

hanpo 当事者によるフリーペーパー
発行団体 代表・編集長

４年生からいじめを理由に不登校になる。2年ほど外との交流をせずにひきこもり状態で過ごし、フリースクールや中間教室などを利用しながら生存する。その後、何度か激しい浮き沈みをしながら高校・大学へ進学し卒業するも、まっとうな働き方がわからずフリーターになる。自身の経験や出会ってきた仲間たちの思いや、つらい経験をして生きてきた仲間たちを繋ぎたくてｈａｎｐｏを立ち上げ、県内そこかしこで生きづらい話をしている。

元島　生 氏 *Motoshima Sho*

NPO 法人場作りネット 代表

24時間365日のフリーダイヤルの伴走支援事業「よりそいホットライン」、SNS自殺防止相談事業など各種相談事業を受託。上田市にてワンコインで誰でも泊まれる宿「やどかりハウス」や、街中に助かる場を作る「のきした」など、街を社会的インフラにするための場作りに取り組んでいる。

元島　勝部さんのご講演で、支援臭や教職員と福祉の連携についての話があり、すごく大事だと思いました。私たちは何のために誰に何をしようとしているのか、支援のあり方をもう一度問い直す必要があると思います。

賃労働という社会構造の中で、不具合を起こしている人たちを「ひきこもり」と呼ぶならば、社会自体が変わらなければいけない。トークセッションでは、そのことも考えてみたいと思います。

生きづらさを抱えた人たちの気持ちに寄り添う支援を

元島　私たち場作りネットは、誰でも駆け込み泊まれるヤドカリハウスを運営しています。家庭の中で抑圧をされている人、特に若い人たちが多く駆け込んでくる助け合いの場所をまちなかにつくることで、そうした問題があることに地域の人が気づいてもらえるように取り組んでいます。

勝部さんの支援臭のお話を聞いて、私が若かった頃、薬物依存症の女性の支援に入った時のことを思い出しました。彼女が依存症になったのは母親の責任と考えてしまい、関係をうまくつくることができず、母親は私の連絡先を本人に教えなかったのです。そのすぐ後、彼女は亡くなってしまいました。目的が強くなりすぎて、本当にしなければいけないことを全く分かっていなかったと反省したことがありました。

草深　私は様々な生きづらさを持っている若者たちの経験や体験談、自分たちが思ってきたことをまとめたフリーペーパーhanpoを発行して、今同じように苦しんでいる人たちに届けています。今年で6年目、通算13号を数えました。支援者にとっては当事者の気持ちを理解してもらう参考資料にもなっています。

私自身は小学生の時にいじめが原因で学校に行けなくなってしまい、それからしばらくひきこもりになって、潜ったり進んだりしていました。

勝部さんのお話の中で、チャレンジできない社会の仕組みの話がありましたが、まさしくそうだったなと思います。

ひきこもっている間、家族に対して大変迷惑をかけてきたなという思いがあります。当事者たちはそのことにずっと悔やんで生きていることを考えると、そのときに自己責任で終わらせることなく、社会とつなげてくれる人たちがうまくやってくれたならという思いがあります

支援臭については、私の場合も「あなたのために何かをするよ」という人が立

ちふさがり、その途端に自分は何かされないといけない人間なのかと思ってしまい、「もういいです」と心を閉ざしてしていました。

心を閉じさせてしまう嫌な感じの大人たち

元島　草深さんにとって嫌な感じのまわりの人とはどんな人でしたか？

草深　1人目は学校の先生でした。いじめにあって不登校になった小学4年生のとき、家族に「甘やかせているせい」と言ってきました。私は「いやいやあなたのせいですよ」とシャットダウンしました。目の前にいる子どもたちが苦しんでいるのは自分に要因があるのかもしれないと疑問に思わない大人でした。

2人目は近所の人です。自宅の隣3軒が元教員のお宅で、家族に対する当たりが強く「あの家は学校に行かすことさえできない家庭だ」と言われました。それは私に対して言われる以上に苦しいことでした。

3人目は地区のおじさんたちで、怖かったです。25年ぐらい前ですので、不登校やひきこもりへの理解がまったくなく、配慮もありませんでした。「学校に行かせることもできない落ちぶれた家だ」と言われたように記憶しています、

母親は知能的な病気があるのではないかと私を病院に連れて行ったこともありました。障がいがあり、いわゆる普通のことができない人間だという見方を世間からされることが多かったと思います。

私の気持ちの中では単に学校の中のトラブルが原因でしたが、まわりから「根本的な問題を抱えている子ども」というレッテルを貼られてしまうことがとても苦しかったです。

元島　本人に問題があり、不適応を起こしている人、困っている人ではなくて困った人と捉えられてしまったということですね。勝部さんはどう思われますか？

勝部　学校や会社では理不尽なことが多いです。本人は傷つき訴えているのに、そんなことで傷ついているお前が悪いと自己責任にされ、なかなか声を出しにくい弱い立場の人たちは泣き寝入りのようになってしまいます。

親にしても「学校なんか行かなくても大丈夫。いつか自分が行きたいタイミングに行ったらいいよ」と言っても、早く行ってほしいという気持ちが毛穴から出ています。本人はそれを敏感に感じるから、不甲斐ない自分がいて、まわりの人から責められる親がかわいそうだなと考えるからますます動けなくなります。

以前から私は社協の仕事を漫画にしたいと思い、『セーフティネット～コミュニティソーシャルワーカーの現場』（※）を出版しました。漫画を描いてくれたのは、たまたまひきこもり経験のある人でした。

漫画を描いてくれた彼に「サーカスの空中ブランコを見たことありますか？あんな怖いこと、どうしてできるんですかね」と聞かれました。ブランコの下には転落防止のネット（安全網）があるから安心して演技ができるわけです。「ネットも用意されず、さあ行けと後ろから押されたら殺されると思うじゃないですか」という話をされて、なるほどなと私は思いました。

「一回失敗して、さらにまた失敗したらまわりに迷惑をかけるんじゃないか。もう戻れないかもと思ったら、動いて失敗することがだんだん怖くなる。今より悪くならないのなら、今のままでいい」と彼は言いました。

ひきこもりという人種がいるわけではありません。職場でいじめられ、自分だって突然そうなるかもしれない。腫れ物に触るというより、普通に話せる関係になっていかないと、別人種でUFOキャッチャーみたいに引っ張り上げてこっちに置くようなことをしている限りはなかなか分かり合えない気がします。

支援臭を出さずに関わるには

元島　福祉関係の人たちが支援臭を出さずに関わるようになるにはどうすればいいのでしょうか。

勝部　その人の良いところを見つけ、才能や能力をいかしてもらい、私たちに力を貸してもらいたいという気持ちが大切です。いいとこ（ストレングス）探しを支援者ができるかです。

NHKのドラマになって社会を動かすことにつながったのは、彼らの力が大きかったからです。そのときを振り返ると、私たちは支援というよりもリクルーターであり、スカウトマンだといえます。

「豊中びーのびーの」の活動では、彼らは高齢者宅への荷物運びや被災地での支援活動など、とても頑張って動いてくれました。

いいところをいくつも探して、その人が何か活躍できることがないかとみんなで考え、話し合うことをしています。悪いところは見つけないことです。本人は自分のことを変えていきたいとか、なんとかなりたいと思っているのに、「この人はやる気がなく、約束も守れないからうまくいかない」と捉えてしまうと、支援者が自分の保身でものを言って相手のことを守らない姿勢になった瞬間に、あなたとは一緒にいたくないと心を閉ざされてしまいます。

元島　支援の技法でいいところ探しをして関わること自体、すでに支援臭がしていると私は思うのですが、勝部さんが支援臭を出さないのは、もっと深いところでその人に対する目線の向け方、あるいは今まで経験してきた中での社会に対する思いが、勝部さんの身体の中にあるのではないかという気がします。

社会に対する怒りが原点に

勝部　私は本人に何か問題があるとは思っていません。この青年をこんなに苦しませるような社会がおかしいという怒りがあるから、彼に共感したいと思っています。私はそういう人間でありたいと思っています。

元島　そこが大事だと考えます。社会に対する怒りはどこからくるのですか。

勝部　今の社会にはいろいろな問題が

※『セーフティネット～コミュニティソーシャルワーカーの現場』①～⑥　制度の狭間にある、支援のなかなか届かない人々へ、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）が住民とともに社会的包摂をしながら支援を展開する様子を描いた福祉マンガ。「びーのびーのプロジェクト」においてメンバーたちと語り合う中で、マンガを作ろうという話になり、2012年3月に1集目を発行。NHKドラマ「サイレント・プア」制作のきっかけとなった。原作:豊中市社会福祉協議会　マンガ：ぽりん　ブリコラージュ発行。

ありますが、私が女性だったからかもしれません。女性であるがゆえに悔しい思いをしてきた社会への怒りが根底にあります。これまで多くの理不尽なことがありました。女性の置かれている立場とか、子育てしながら生きている人たちのしんどい気持ちを理解できない人たちからの言葉にたくさん傷つけられたので、人と寄り添う仕事をするのだから、そんな態度をする人間には絶対になるまいと思って仕事を続けています。

元島　それは私も同じです。この人がこうなったのは社会の一員としての私にだって責任があります。自分には全く責任がないという大人は信用されるはずがありません。勝部さんは女性としてそうした思いをもつ土壌があったし、多分話し合える仲間も必要だったのではないでしょうか。

生きづらさを抱えた人の背景に何があるのか思いを寄せる

勝部　学生の時に教育実習で担当したクラスに忘れ物してくる子や遅刻してくる子がいました。担任の先生は忘れ物をするな、遅刻はするなと当たり前のことを言って指導していました。

でも、忘れ物をする子は、兄弟がたくさんいて家の中の片付けができていない家庭でした。遅刻してくる子に訊ねると、母親が働いており、夜遅くまで働いている母親を待っているから、朝起きるのが遅くなって遅刻してしまうとのことでした。

その子たちは言い訳もせず、自分のせいではないのに「遅刻するな」と怒られている。なぜこの子たちがこんなに悩まなければいけないのか理不尽さに憤りを覚え、本当のことを見ようとしない大人がたくさんいるのだなと思いました。

その人がなぜその状況にあるのかを深掘りせず、ただ困った人と見てしまったら、その人が心を開くことはありません。

草深　なぜ困っているのかを伝えられないから困っているのに、自分のことを理解してくれる人かどうかもわからなければ、心を開きたくはないのです。

思い返すと、これまで私が心を開いてきた人は、裏表がなかった人でした。社会の問題を自分事として捉え、怒ってくれる人は信頼ができ、損得もなく自分の家庭や趣味のことなどを話してくれる人は心を開示しやすかったと思います。

感情を見せることなく、これは自分の役割だからこういうことをやっているんだよと建前だけを話される人は信頼できず、話しにくかったかもしれません。

元島　勝部さんご自身はどうですか。

勝部　ケースワークやソーシャルワークでは、非侵犯的態度とか感情統制といった行動規範が示されていますが、私はすぐ泣いてしまって感情が出てしまいます。話をしていて感情が入るところはプライベートでも同じで、支援者として構えていると、相手と距離があいてしまいます。

一人も助けられない人は誰も助けられない

元島　組織の中では制度に当てはまらないから私には何もできないかもしれないと思う人がいます。勝部さんは社協という組織での経験の中で、そうした関わりができるようになるには何が必要だと思いますか。

勝部　そうした壁に突き当たっている人は多いと思います。今私は局長の立場ですが、かつてワーカーのときに、「そんなにいろいろやるな、同じような人が100人来たら100人支援できるのか」と言われ、「何人来てもできます。100人来たら100人一生懸命頑張ります」と応えていました。

そうすると、一人の人としっかり向き合って助けたことのない人は誰も助けられるはずがないとだんだん分かってきました。一人を助けているみたいだけれど、同じような人たちがその後ろにいて、私がまだ見えていなかった人たちを救える仕組みだってできるかもしれない。だから一人にきちんと向き合うことは、みんなを助けることとつながっていると考えるようになったのです。

元島　私が業務の中で大事にしていることは、振り返りです。例えば一人の相談に対応した後に、それがどういう意味があるのか、その人はなぜこうした状況になってしまったのかを仲間と話し合い、意識を共有しています。それがネットになるのではないかと思います。勝部さんも仲間との話し合いを重ねていますか。

勝部　支援調整会議において、その人の支援の終了を一体誰が決めるのか疑問に思うことが数多くあります。本人が終了と言えばいいけれども、こちら側で勝手に終了することではありません。どこまで支援するのか、話し合いを重ね、意識を分かち合うことが大事だと思っています。

また、生活困窮者自立支援法はまだ運用経験のある管理職がほとんどおらず、みんなで道を開いていく取り組みですので、取り組む仲間がいて、こうした学び場があることは大切になると思います。

草深　組織としてはルールと規則の中でしか支援は評価されません。支援者の多くは自分の仕事をどこまでやっていいのかわからず、孤独だと思います。私も組織の代表ですが、スタッフに支援の継続を理解してもらえないことがあります。だ

から地域の中でそうしたネットを作っていくことが必要なことだと思います。

地域の人とともに支援活動をする意味

元島　支援者の孤独は問題ですね。まちなかで活動していると、地域の人たちの対応の方が良かったりすることがたくさんあります。例えば、目の前に寒さで震えている人がいて、「あなたは何に困ってますか、それならこの制度がありますよ」と言うよりも、「大丈夫?寒くない?」と言って毛布を1枚さっと貸してあげるだけでいい。そこから話が始まります。しかし、支援という立場に立った途端に、私たちは毛布を貸せなくなるのです。

「あの人はこういう人だから」と事情を知っている共通の仲間がいれば、安心してその人に気軽に話しかけることができます。しかし共通の仲間がいないと「この人に話しかけたら責任を問われるかもしれない。怒られるかもしれない」と躊躇してしまうことが支援者にも起こっていると思うのです。

勝部　支援者が地域のいろいろな人とつながり活動すれば、いろいろな人たちの協力を得て、いろいろな方法と制度で困っている人たちを助けることができます。

例えば当事者が就活のために自転車があったらいいなと思っても、組織だと一人だけ特別扱いで自転車を貸すことはできないと言われてしまいます。しかしその当事者を知っている地域の人がいたら、あそこの自転車屋に頼んだら貸してもらうことができるよって言ってくれる。そうした力をたくさん集めることが支援につながるわけです。

元島　支援者は何かあれば責任を問われるかもしれないし、みんな不安だと思います。だから自分が何に対して不安なのかを深く話せる仲間が必要だと思います。地域に何人もの頼れる人がいたら安心感を持って当事者に関わることができるから、本人も安心できることでしょう。

勝部　ときには支援者が自分の弱みを

見せることも大事だと思います。支援者が自分一人でなんとかしようとして撃沈してしまってはいけません。支えることが上手な人は、支えられることが上手な人です。

人に迷惑をかけない生き方はどれだけの美徳なのか

草深　「助かり合う」という言葉がすごく好きなのですが、人に迷惑をかけないことがどれだけの美徳なのかと疑問に思っています。人に迷惑をかけないで生きている人などいないけど、それをみんな目標にしているから苦しくなるのではないかと考えます。

勝部　昨年、スウェーデンの大学生が豊中市社協に実習に来ました。福祉国家からなぜ来るのか、日本とスウェーデンの福祉は何が違うのかを訊ねたところ、日本は敷居の低い相談窓口などSOSを出せるきっかけをいくつもつくっているからとのこと。スウェーデンはどうなのかと聞いたら、「私たちは困ったら市役所に行くのがルールです」と学生は答えました。サービスを受けることは権利であると学校教育を受けているので、迷惑かけてはいけないなどとは誰も思っていないのです。国が違えば、文化や考え方も違います。私たちの当たり前はひょっとして当たり前じゃないかもしれない。私たちが人に迷惑をかけないことが美徳で、自己責任と思わされていることは、日本という国の特徴であり、それが今の社会全体を苦しめているとも言えるでしょう。

社会とつないでくれたかっこいい大人との出会い

元島　オンライン参加のhanpoのメンバーの方からも意見を聞いてみます。

参加者1　支援臭についてですが、私がひきこもりから脱するきっかけとなり、関わってくれた人が近所の塾の先生で、私にとってすごくかっこいい大人でした。社会とつなげてくれる特別なスキルを持っていたわけではなく、ただただかっこいい大人だったことを思い出しながら聞いていました。

元島　興味深いですね。どこがかっこよかったのですか。

参加者1　私の好きな哲学や文芸についての造詣が深く、どこか社会を斜めに見て生きているところがある人でした。決められたルールなど関係ないよといったちょっとバンカラ的な雰囲気がすごく良かったです。

草深　私も余白を持っている大人が魅力的に見えました。必死に余白を遊んでいる人は格好いいけれど、仕事だけを必死にやっている人たちは魅力がありませんでした。学校の先生はそうでしたね。

支援者の方たちはそんな魅力的な大人の人たちをたくさん知っていてほしいです。

元島　私も高校のとき、いつも生物室でギター弾いてる先生がいて大好きでした。どうしたらそんな魅力的な大人に出会えるかをデザインすることが支援者には望まれます。例えば、あの人とあの人とをくっつけて、こういう場所を作ってみようと企画を立てるようなコーディネート力があるといいですね。

なくてはならない息がしやすい居場所

参加者2　まちの中に居場所があることがとても大切なことだと思いました。仕事をして役に立つとか、何かの条件付きとかではなく、「まちのどこに居てもいいよ」といった遊びと言いますか、余裕、隙間はとても必要です。特別な目的もな

※上田市の犀の角　上田市海野町商店街にある劇場設備、カフェ、ゲストハウスを併せ持った施設。演劇や音楽、ダンスなどさまざま表現活動を楽しむこともでき、地域の人とアーティストやバックパッカーが相互に交流することができる場として2016年にオープン。
「変な人でも住みやすい街に」をコンセプトに様々な価値観や趣味、身体的特徴を持った人たちが居ることができ、交流する場所となっている。現在は子どもや若者たちの部活動の拠点として活用されているほか、女性が困った時に泊まれる部屋としても開放されている。

くつながることができる場があると息がしやすいと思います。

私が過去にひきこもっていた時は、家の中にしか居場所がなく、まちにはとてもじゃないけど出られないという状況にありましたから。上田市の犀の角（※）のような居場所にもっと早く出会えていればよかったと思ったりします。

元島　人々が出会う場として草深さんは祭りをあげていますね。

草深　私は祭りが好きで各地の祭りに出かけています。昔から続く祭りに参加している人に話を聞くと、同じ地元で同じような経験をみんながしているから、祭りの中で若い子たちが悩み話をすると、年配の人たちも「わかるよ。それ」って共感してくれるというのです。こは地域の力であり、日本の社会の中ではすごく大事なことだと思います。

元島　祭りになると普段まわりから疎まがられていた人が「俺の出番だ」といわんばかりに御神輿を担いで盛り上げるみたいに、自分にできることがそこに発生するというのは、祭りの要素が強いかもしれませんね。

自分の弱みを強みにして支援にいかす

元島　会場の皆さんからもご意見、ご質問をお聞きしましょう。

参加者3　生活困窮者の支援をしています。私は幼少期から、カテゴライズされない体質から、生きづらさのようなものを抱えてきました。医師や学校の先生に相談もしましたが、体質を理解してくれず、一緒の温度感で接してくれなかったので「この人分かってくれない」と子どもながらに失望しました。地域の中とか周りで少しでも相談できて理解してくれる相手がいたら違ったかもしれないなと思いました。

今は気持ちを切り替え楽しく生活できていますが、自分がそういう人になりたいと思って相談員の仕事を志しました。自分の生きづらさがあったからこそできる支援があるのではないかとあらためて考えていきたいなと思っています。

勝部　自分の弱みを強みに変えるということですね。苦しいからこそ分かるということは絶対あります。ひきこもった経験があるからこそ、いろんな人たちの気持ちに寄り添えるという意味で、hanpoのフリーペーパーも大変面白く読ませていただきました。

ひきこもっている人に「どうして出てこないのか」と平気で言うような人にはなりたくないという思いは、生きづらさを抱えた人たちへの思いにもつながります。

行政における支援の一丁目一番地は当事者の声を反映させること

参加者4　以前私は市議会議員として豊中市を視察したことがありました。こども専用LINE相談や、子ども健やか育み条例をつくり、子どもと共に親が育つ子育ち支援などの事業を始めるなどしていてすごいなと思いました。

さて、勝部さんには行政を前に進めるためにどんなことをすればいいのか、教えていただきたいと思います。

勝部　絶対守らなければいけないというのが行政のルールですので、一つに条例を定めるという方法があります。

そこで条例をつくるときに、対象となる当事者の意見がどれだけ反映されているかといった当事者性がとても大事です。生活困窮者自立支援法は、給付があるわけではなく、相談によって世の中を変えていこうとしていますので、「その人らしく、その人がいてくれることがうれしい」「会えてうれしい」といったものをいかにつくっていくのかが問われています。

まずは現場に行って、当事者の方から今何が問題かを聞き出すことです。当事者は何が課題なのかをたくさん知っています。

第二に、当事者が様々な場面で声をあげられるようにしていく土壌づくりも重要です。

豊中市では全国に先駆けて一般の学校でインクルーシブ教育を取り入れており、昭和40年代から医療的ケア児も学校に行っています。そうすると、当たり前がすごく変わります。障がいのある人たちが毎日隣にいるので、自然に手を出して支えたり、運動会ではどうやってみんなが楽しめるのかを考えたりするようになります。存在が世の中の既定を変えていくのです。

困っている当事者がしっかりと声をあげられるようすることは、様々な取り組みを考えるうえでの1丁目1番地になると思っています。

学校と福祉との連携はプロジェクトチームづくりから

参加者5　生活困窮者支援の相談員をしています。最近は不登校やひきこもりの方がとても多く、30、40代の方になると、やはり子ども時代をどう過ごしてきたのかが原点となります。

豊中市では「教職員のための福祉との連携ガイド」をつくられたそうですが、学校との連携はなかなか難しく、先生の気づきを福祉につなげるにはどうすればいいのでしょうか。

勝部　発見と解決は両輪です。把握したことをサポートできる地域資源とつなげることが大事です。しかしスクールソーシャルワーカーが1年単位の契約だったり、先生も転任したりするのでなかなか地域資源とつながらないことが多いのが実情です。

豊中市では、学校の当事者である先生と子どもたち、こども家庭センター、地域の代表者と私たちソーシャルワーカー、生活困窮者支援の担当者が一同に会し、プロジェクトチームをつくって、お互いの困りごとなどを話し合うところからガイドブックを作成しました。

作成したガイドブックは主任児童委員の方と一緒に配って回ります。配布後、今度はそれでうまくいった実践を先生たちにフォーラムで報告してもらうと、ほかの先生たちもやる気になってくれますが、それでも軌道に乗せるまで5年はかかりました。

コロナ禍もありましたが、週1回お弁当を届けながら今は90世帯ほど訪問しています。不登校の900人のうちの半分ぐらいは大体把握できるようになりました。豊中でも取り組めているのでほかの地域もできると思います。

参加者5　今回皆さんのお話を聞いて、想いを伝え合ったり、感情を出したりするのは、仕事でとても大事だと思いました。私たちが孤立して苦しくならないように、スタッフ間でたくさん意見交換をしたり、自分たちもSOSを出したりしながら、これからも頑張っていきたいと思います。

行政文書の表現も当事者と検討が必要

参加者6　障害者の相談支援センターで相談を担当しています。県からひきこもり支援のあり方の方針が示されてますが、その中の文言も支援臭がしない表現にしたらどうかと思いますが、ご意見をお聞かせください。

草深　行政の文言から支援臭を取り除くことは無理で、言葉を変えたとしても、多分変わらないと思います。

支援人材育成の項目にどんな人たちが必要なのかを明文化するなら「変な大人が必要である」を加えていいのかもしれませんね。

元島　支援人材や相談窓口の設置の重要性を理解してもらう意味でも、「ひきこもり」とはどういう存在であるのか、“魂”的なことを深く掘り下げて記述することも必要ではないかと思います。このあたりは当事者と一緒につくり直す必要があるのではないでしょうか。

勝部　哲学の話もありましたが、ノウハウをいくら真似しても“魂”の部分が伝わらないので、その人をどう見るか、生きづらさをどう捉えるかをお互いに理解できる表現に変えてもいいかもしれません。

草深　支援臭に関することは、ひきこもり支援実践研究会（※）であらためて深掘りしていきたいと思います。

多機関連携の課題

参加者7　豊中市の障害福祉計画の理念は素晴らしく、見習わなくてはいけないなと感じています。20近くある相談窓口を整備されてる中で多機関連携において苦労されている点はありますか。

勝部　重層的支援体制整備事業は、多機関協働によって複雑化・複合化した問題をみんなで共有して、仕組みづくりを進めるという事業です。しかし多機関協働は縦割りをなくすだけなので、重層ではなく横断に過ぎません。横断は大事ですが、そこで課題をキャッチしてどうやって仕組みをつくるかについては消極的です。

本当に困っている人にどう向き合うかは、なにより地域の人が知っています。地域の実態を知らずに、地域づくりだけ、参加支援だけ、多機関連携だけと分化してバラバラに動いてしまう可能性があるため、今回の審議会（※）でもそれが大きなテーマになっています。今後皆さんが理解しやすく連携できる形を考えていくことが望まれます。

生きづらさを抱えた人の支援を通じて社会を変える

元島　私たちは何のために誰に何をしようとしているのかが大事なことだと思います。表層的にひきこもりの支援をするのではなく、その人をきっかけにしてどのような社会をつくっていくのかを職場の

みんなでしっかり話をすることが大切だとあらためて思いました。

草深　今日、皆さんの話を聞いていて、今の社会は困っている人たちのことをあまり考えたくない人たちにとって都合がよい社会になっているんだなと感じました。人と人とが社会の中で生きていくには、ルールだけではなく、目の前の人がどんな人なのかを考え、みんなが生きやすい地域をつくっていく必要があります。これからもいろいろな方と思いや情報を共有していきたいと思います。

勝部　今日はこの会場で草深さんやhanpoのお二方が自らの経験や意見を話してくださいました。当事者の存在をみんなが知ることによって人は優しくなれます。

生きづらさを抱えた人を、見ていないから、知らないから、分からないからといって、不作為であったり、他人事になってその人たちのことがなかったことにされたりすることが多々あります。私たち支援者は、そんな生きづらさを抱えた人たちの存在が社会の中でどうあるのが一番よいのかを考えていく最も近いポジションにいます。

生活困窮者自立支援法は、相談を通じて社会を変えていくことが問われています。それは一人ではできないので、今日のように全国の仲間と交流したり、愚痴を言ったり、情報を共有し工夫したりしながら、取り組みを進めていってほしいと思いました。本日は長野県の皆さん、ありがとうございました。

司会　今後も皆さんと一緒にお互いを知り、振り返り、語り、分かち合い、そして助け合ってネットを作ることで、支援者も住民も一人ではないと思える地域づくりを目指していけたら幸いです。

※ひきこもり支援実践研究会（通称ひじ研）　長野県のひきこもり支援に関して、本人の意思を尊重した個別や地域へのアプローチを学び、意見交換を通じて課題に対応する力を 向上させることを目的として、2022（令和4）年から県内各地で開催。主にひきこもり経験者や当事者、家族の話を直接聞き、当事者の視点から必要とされる支援への体制、姿勢、居場所づくり等について学び、情報共有をはかっている。

※審議会（地域共生社会の在り方検討会議）　厚生労働省による地域共生社会の実現に向けた方策を話し合う新たな有識者会議。勝部氏は構成員を務めている。

イラスト　アオヤギマユミ

2025 年 1 月発行　　編集・発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会
〒380-0936 長野市中御所字岡田98- 1 長野保健福祉事務所庁舎内
TEL. 026-228-4244　FAX. 026-228-0130
http://www.nsyakyo.or.jp/